

校舎の再利用——明治と大正時代の場合

平成26年4月にオープンした太宰府市公文書館は、元は大学のキャンパスだった施設の一部を再利用して置かれた施設です。現在、例えば廃校により生じた空き校舎をどうするかなど、遊休施設の活用は地域の主要な課題の一つに挙げられますが、公文書館の設置は、施設の有効的な活用の一例と言えるでしょう。このように、校舎などの建物を再利用する、という発想は今に限らず昔からあったことですが、現在の余剰対策とは少し事情が違ったようです。

太宰府では大正2（1913）年、尋常小学校に高等小学校を併設することになります。が、これは、大野村外7か町村（水城・太宰府・御笠・山家・筑紫・山口・二日市）学校組合により明治33（1900）年に建てられた御笠北高等小学校（観世音寺来木）を解体し、それぞれの町村の負担で高等小学校を持つことになったためでした（当時、尋常小学校は6年制で義務教育とされ、高等小学校にはその卒業者が進学）。その際、御笠北高等小学校の土地と建物を組合から水城村が買い取り、別の場所（坂本石橋）にあった尋常小学校を御笠北校跡地に移転して、水城尋常高等小学校が置かれます。

大正2年の水城村会議事録によると、御笠北高等小学校の校舎の一部はすでに二日市町が買い取っ

ていますが、水城村は交渉委員を立てて二日市町から御笠北の校舎を買い（1251円）、代わりに元の水城尋常小学校の校舎を二日市町と大野村に売る（1494円）ことで落着いています。高等小学校の設置に向けてどの町村も校舎は必要だったことから、取り引きは円滑に行われたことと思われ

ます。ところで、御笠北高等小学校は、明治19（1886）年に二日市に置かれた御笠高等小学校が、北と南（針摺）

に分かれてできた学校でした。御笠高等小が設置された当時にさかのぼってみますと、その校舎はもともと同18年まであった御笠中学のもので、校舎や備品を転用して開校しました。御笠中学のルーツは、同13年に戒壇院内にできた、六畳二間の県立甘木中学・思川分校です。同15

年には町村立の思川中学となり、翌年には木造2階建て56坪の校舎を新築して二日市に移転し、御笠中学となります（『筑紫野市史』）。大学進学への一階梯でもあった中学校は、地域の「まさに最高学府」でしたが（『甘木市史』）、財政的にも維持が難しくなり2年後に廃止、地域はまず初等教育の充実に力を注ぐこととなります。

